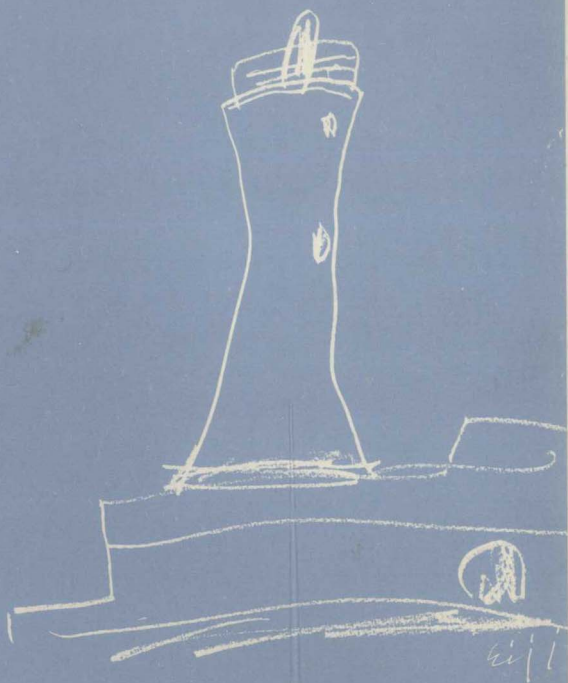


出帆旗

庄野英二



編集工房ノア

出帆旗

庄野英二

編集工房アズ

あひだ

出帆旗

一九八八年四月二十五日発行

著 者 庄野英二

発行者 湊沢純平

発行所 株式会社編集工房ノア

大阪市大淀区中津三、一七—五

電話〇六（三七三）三六四一

振替大阪四、三〇六四五七

印刷製本 株式会社アリネグラフィカ

© 1988 Eiji Shono

0093—8806—7641

定価一八〇〇円

不良本はお取り替えます。

庄野 英二
一九一五年、山口県萩に生まれ、大阪帝塚山に育つ。関西学院大学文学部哲学科卒業。帝塚山学院に勤務するかたわら、詩、童話、小説、随筆、紀行文、戯曲等を書く。日本文芸家協会、日本ペンクラブ、日本エッセイストクラブ会員。童話雑誌「びわの実学校」編集同人。

出帆旗
目次

1	はじめに	7
2	難破船	8
3	第二十八共同丸と第十八共同丸	15
4	遠泳	18
5	香取丸	22
6	ダグラスの海賊	25
7	ジャックナイフ	28
8	オルゴールとライスカレー	34
9	甲山と時計台	36
10	チラチャップ	37
11	うすりい丸	41
12	レンバン島	46

13	クリーブランド号	56
14	帆船エビア号	61
15	漂流者	77
16	エルトグロール号	88
17	タースデー帰り	94
18	原音松さんの話	110
19	対馬	120
20	霧笛	128
21	トミーさんと木曜島	133
22	モラエス	157
23	キャプテン広瀬と夫佐子さん	164

カバー・本文装画 著者

出帆旗

1 はじめに

気がついたときには、私は海や船が好きになっていた。

島、岬、入江、さんご礁、礁湖、漁港、ポンポン船、ヨット、機帆船、汽船、帆船、マスト、帆綱、デリック、舷灯、船首像、汽笛、霧笛、ハッチ、甲板、錨、信号旗、滑車、コンパス、舵輪、八点鐘。

海と船にかかわりのあるものは、みんな好きになっていた。

私は海岸に生まれたのでもなく、親が漁師や船乗りであつたわけでもなく、水産学校や、商船学校に学んだこともなかった。

気がついたときには、海が好きになっていたが、ヨットもモーターボートも持っていないし、船会社や港湾業に就職した経験もない。

私は今日まで、海を主題にした童話や小説や戯曲を多数書いてきている。

「あなたは どうして海が好きになったのですか？」

友人たちからよく訊ねられることがある。

私はそのたびに即答できないで、考えあぐねなければならなかった。はっきりと自分でもなっとくできるような答えを見つけたことができなかった。

気がつくとい私は海が好きになっていたのだ。なんで好きかといわれても、好きだから好きというより答えようがない。けれどもつきつめて考えてみると、私に影響をおよぼしていたいくつかの要因らしいものが、漠としながらも思いうかんでくる。私はそのいくつかを古い記憶の中からさぐりだしてみようと思いたった。そしてまた、今日までの私の人生での、各地の海の思い出や、海とかかわりがあつたさまざまなことから、思いだすままに書き記してみることにした。

2 難破船

私を海や船と結びつけた最初のきっかけは、子供のときの読書である。

最も幼いときに読んだのが、有島武郎の「二房の葡萄」であつた。主人公の少年は、絵を描くことが好きであつた。

主人公の少年は、横浜港の岸にそつて小学校に通つていた。彼は沖にうかんでいる汽船

が好きであつた。彼は汽船の絵を何枚か描いたが、美しい海の藍色と、汽船の水ぎわの洋紅色を氣にいったように描くことができなかった。彼の絵の具では、どうしてもその美しい色をだすことは不可能であつた。

少年はとうとう学校の昼休み時間、級友の舶來の絵の具箱から藍と洋紅色の絵の具を、魔がさして盗み出し、それが發覺する。

まだ見たこともない横浜港と汽船の姿が、主人公の少年同様私の心に深く灼きついてしまつていた。

「二房の葡萄」のつぎが、「ロビンソン漂流記」であつた。私は冬休みの終わりに、父と街へでたときに買つてもらつた。私はその晩夜通し「ロビンソン漂流記」に読みふけた。私は夜明けに読み終わるまで興奮し続けていた。

アミーチスの「クオレ」も小学生時代の愛読書であつた。

いまだに記憶しているのは「難破船」と題した物語である。

十二月のある朝、リヴァプールの港から一隻の汽船が出て行つた。乗組員七十人を合わせて二百人以上が乗船していた。船長と船員のほとんどがイギリス人であつた。乗客の中にはイタリア人が多数いた。船はマルタ島行きで空はくもつていた。

船首に近いマストの下に、十二歳の少年が一人きりで、まるめたロープの上に腰をかけていた。少年はみすばらしい身なりで破れ毛布を両肩にかけ、右肩から斜めに革かばんをさげていた。

出帆後まもなくイタリア人の船員が、一人の少女を連れてきた。少年の名はマリオ、少女は一つ年上でジュリエッタといった。マリオよりも背が高かった。

少年には父も母もいなかった。労働者であつた父が数日前に死んだので、イタリア領事が少年を故郷パレルモに送り帰すことにしたのであつた。パレルモには少年の遠い親類がいた。

少女の故郷はマルタで、両親がいたが貧しかった。少女は、自分をたいへんかわいがつてくれる寡婦のおばに連れられて、前の年からロンドンでくらしていた。しかし、数か月前おばは、一文も残さず乗り合い馬車にひかれて死んでしまった。少女もまた領事の世話でイタリアに送り帰されることになった。

風が強くなって船がゆれだしたが、二人は船酔いもせず海をながめていた。ときどき二人は話を交わした。乗客たちは二人を姉弟だと思つていた。

海はますます荒れてきた。日没になって、二人が別の船室に降りていこうとするとき、

大波のしぶきがおおいかぶさってきた。少年はそばのベンチに叩きつけられた。少女が少年を起こそうとひざまずくと、少年のひたいから血が出ていた。

「血が出ている！」

少女は自分の髪から赤い布をとって少年の頭に巻いてやった。両はしを結ぶためにその頭を胸に抱きしめた。少女の黄色い服の胸のあたりに血がついた。

少年と少女は、「お休みなさい。」と言いあつてから、となりあつた二つの階段を自分たちの船室に降りていった。

乗客たちがまだ眠りにつかないうちに大嵐がおそいかかってきた。またたくまに一本のマストがぐだけ、三隻のボートが木の葉のように飛び散った。船内はわめき声、泣き声、祈りの声で耳をつんざくばかりであつた。

嵐は夜通し続いた。明けがたになると一段とひどくなった。波が甲板になだれこんで、すべてのものを粉碎して流し去った。

船倉甲板に穴があき、水が滝のように流れこんできた。船員たちはポンプをけんめいに操作した。

乗客たちは生きたここちもなく大広間にかたまっていた。そのうちに船長が客たちの前

に現れた。

「船長、どうなるのです。助けてください。」

客たちはどなりわめいた。

船長は、一同の黙るのを待って落ちついた声で言った。

「あきらめましょう。」

客たちは蒼白となり墓場のように沈黙した。

船長は残っている救命ボートを降ろすように命令した。

波はすこしおだやかになってきたが、船はゆるゆると沈みかけていた。マリオとジュリエッタは帆柱にしがみつき、目をすえて海を見つめていた。

何人かの客がボートに移ったが、すぐにいっぱいになった。多くの客は甲板に氣を失って死んだようになっていた。

「もう一人乗れる。女を！」

ボートの船員が叫べんだ。

ひとりの女が船長にささえられて進み出た。しかし、ボートと船のあいだを見ると飛び降りる勇気がくじけて倒れてしまった。

「子供を一人！」

ボートの船員が叫んだ。

その声を聞くと、マストにしがみついて石のようになっていた少年と少女がいつせいに叫んだ。

「わたしを！」

「ぼくを！」

おたがいに相手をおしのけて船側へ飛んでいった。

「小さいほうだ！」

ボートの船員が叫んだ。

その声を聞いて少女は動かなくなってしまった。うつろな目でじつとマリオを見た。

マリオも、ちよつと少女のほうを見た。彼女の胸に血のしみがついているのが見えた。

「小さいほうだ！」

船員がいらだって叫んだ。

そのときマリオが、自分の声とも思われないさけび声をあげていた。

「この人のほうが軽いのです！ ジュリエッタ。さあ飛び降りるんだ。あなたにはお父さん

やお母さんがいる。さあ飛び降りて。」

マリオはジュリエッタのからだをつかんで海に投げこんだ。

少女は、あつと叫けんだが、ついで水音をたてていた。一人の船員が少女の腕をつかんでボートの中に引きずりあげた。

ボートは危機一発で、船の沈没のうず巻きに巻きこまれない海面までのがれることができた。

少女は少年を見上げて、わつと泣きだした。泣きながら、

「さようならマリオ！」

と叫んだ。

少年は、片手を高くかざして、

「さようなら」

と答えた。

少女は顔をおおった。

少女が再び頭をあげたときには、もう海面から船は消えていた。